



発行日 2014年12月1日 発行人 細川正善

編集責任者 廣澤道秀 編集担当 佐藤慧真

発行所 SOTO 禅インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 貞昌院内

Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: <http://www.soto-zen.net/>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO 禅インターナショナル

2014年 Vol.55



9月5日 大本山永平寺ワークショップ



大本山永平寺監院老師にごあいさつ



大本山總持寺での国際布教関係示寂者追悼法要



9月17日 大本山總持寺ワークショップ

巻頭

真徳を慕う

大本山永平寺監院 さとう こうしゅん 佐藤好春



両大本山に於きましては、安居僧を海外研修生として年に2～3名、約3ヵ月間アジア・ヨーロッパ・南北アメリカの禅センターに派遣しています。この者たちに与える影響は大きく、正法禅をより真摯に自分の宗教人生に受け止める機縁になるようです。

また、海外から出家者が上山掛塔し、一衆和合の威人力を直かに法悦しているようです。中には全く日本語の話せない者もありますが、肅々と鳴らし物の配役に勤しむ姿には、あまりに純粋な求道心が醸し出され、

古参僧たちにも繰り返し初発心を促しております。

国際布教に今生の命を削られた諸先達、その法燈聯芳に尽瘁中の宗師達、そしてその推進に法力を振るわれる貴会諸師の尊い浄行が、当処に於いても活撥撥地なる道場となって充実させています。

宗門では両祖のみ教えを相承せんことを切望された峨山禅師様の大遠忌の年をお迎えする而今、世界では、抑制する目処の立たない民族・宗教の対峙が続いています。貴会の活動が、人々の抱える不安と恐怖から、平和と安寧のときへと導く力の一端にならんことを望んでいます。

特集 両大本山ワークショップ抄録

坐禅のパラダイム・シフト 「命令&コントロール」から「感じて許す」へ

曹洞宗国際センター所長 ^{ふじ た いっ しょう} 藤田 一 照



受講者と共に脚を組みながらレクチャーする
藤田一照師（大本山總持寺）

去る9月5日（金）大本山永平寺に於いて、また9月17日（水）には大本山總持寺に於いて、2014年度SOTO禅インターナショナル両大本山ワークショップが開催されました。今回は講師に曹洞宗国際センター所長の藤田一照師を迎え、藤田師の安泰寺やアメリカのパイオニア・ヴァレー禅堂などから現在に続く坐禅修行・指導を通した只管打坐の参究についてお話いただきました。大本山永平寺では「坐禅は安楽の法門なり」を主題に、また大本山總持寺では「坐禅のパラダイム・シフトー『命令&コントロール』から『感じて許す』へ」を主題とした講演が行われました。以下には一般の受講者の参加もあった大本山總持寺での講演についてまとめてあります。

なお、大本山總持寺では、この講演に先立って国際布教関係示寂者追悼法要が行われましたことをご報告いたします。

大本山總持寺ワークショップ抄録

● 坐禅の特別ワンポイントレッスン

（主に一般の聴講者に対して）

今回のテーマを「坐禅のパラダイム・シフト」とさせていただきます。まずパラダイムというのは、そもそもの認識の大前提となっているような考え方の基本的な枠組みのようなもののことです。また、シフトというのは根本的に何かが質的にガラッと変わってしまうという意味です。例えば天文学でいうと天動説から地動説への変

化、また物理学でいうとニュートン力学から相対性理論や量子力学への変化という具合に、問題の立て方や取り組み方の大きな枠組みが根本的に劇的に変わってしまうことをパラダイム・シフトというのです。

そういう意味合いにおいて、仏教はある種のパラダイム・シフトとして誕生したのではないかというのが私の考えです。具体的にいうと、釈尊が当時のインドで主流だった宗教的行法である修定型の瞑想や苦行を放棄して、木の下に端坐したときにパラダイム・シフトが起こり、そのシフトから生まれたものが仏教として我々に伝わってきたのではないかということです。

今日は總持寺の修行スケジュールの関係で（同時刻に大祖堂において大遠忌焼香師諷経が厳修されていたため）修行僧の皆さんが後で入ってくるそうですが、それまでに30分ぐらいありますから、一般の皆さんのための坐禅の特別ワンポイントレッスンを行いたいと思います。まず坐布の上に坐ってください。

私たちが坐っているとき、骨盤の一部である坐骨が坐布の上に乗っています。骨盤の真ん中にある仙骨から背骨が上方向に立ち上がっています。坐禅では、背骨のあり方が一番大事なことで私は思っています。

皆さん、ではまず坐骨を坐布の上に置いた状態で、右脚でも左脚でもいいですからどちらかの脚の膝を曲げて坐蒲の方に近づけ、その前にもう一方の脚を曲げて並べてください。伝統的にはここからさらに足を反対の膝の上にのせて脚を組みます。それが一番大事なことでという人もいますが、この脚を組まない、安楽坐という坐り方ですら楽に坐れないのに、無理をして脚を組むと、坐禅がまさに苦行になってしまいますし、上体もねじれたり傾いたりしてきちんと坐れなくなるので、私はそういう無理なことはあまりお勧めできません。脚を組むことよりも大切なのは、背骨が柔らかに上下に伸びているような状態で坐ることです。坐禅の姿勢で大事なことは、動かないけれども、いつでも動けるような柔らかい状態であること。じっとしているけれども、がちっと固まってはいないことです。解剖学的にいうと、表層の筋肉をなるべく休め、リラックスさせて、姿勢をつかさどる深層筋（インナーマッスル）と骨格のバランスの働きに最大限まかせるということです。ある固定的な姿勢でそこに硬直的に居ついているというのではいくら外見が

良く見えても、坐禅としては良いクオリティとはいえません。からだの内外に自由なスペースを保証することが大切です。

背骨がのびのびと解放された状態で坐れるようになるために、私の坐禅会ではいろいろな稽古をしています。それをちょっとご紹介します。まず坐蒲の上で、骨盤をゆっくり、ていねいにごろりと転がしてみてください。自分の骨盤をゆっくり無理なく後ろから右へ、右から前へ、前から左へ、ブランデーグラスを回すように回すのです。上半身を動かすのではなく、自分の骨盤をよく感じながら、ゆっくり丁寧に回します。骨盤の傾きに対応して背骨の形が自然に変わっていき、あごの開き具合も変わっていくことを感じてください。それは自分で考えてからだに命令してそうしているのではなく、からだ全体のつながりでそうならざるを得ないという形で起きてくるのです。その邪魔をしないで、起きるのを許していくというところがポイントです。…はい、けっこうです。では次に同じようにして、おへその高さでおへそを水平に丸く回してみましょう。…はい、そのくらいでいいでしょう。今度は乳首の高さで回します。肩甲骨を固めたままでは出来ませんね。動きに応じて肩甲骨同士が離れたり近づいたりしているのを感じてください。…はい、結構です。

では最後に、頭を丸く水平に回します。どうやるかというまず、胴体と頭の全体を感じながら、それを重さで地球に引っ張られる感じで前へゆっくり倒し、そこから左、後ろ、右、前へと回してみてください。…はい、今度は逆に回します。最後に前に倒した状態に戻ってきます。そこから息を吸いながら、ゆっくりと背骨を順番に下から上に積み上げていくような感じで起き上がり、最後に頭を首の一番上に置きます。さあ、どんな感じでしょうか？

人間のからだを見てみると、骨盤の真ん中にある仙骨の上に5つの腰椎、12の胸椎、7つの頸椎があって、それに頭蓋骨と骨盤を入れて全部で5つのそれぞれ独立した働きを持った骨のグループが積みあがって出来ています。これをうまく伸びやかにつなげていって、なるべく力を使わず骨格のバランスで姿勢を維持するように工夫するのです。つまり、筋肉の緊張で姿勢を維持する頑張り・力みのパラダイムから、頑張り・力みを手放すリラックスのパラダイムにシフトしていくのです。

自分のからだ全体と床とがどういう関係で坐っているかを深く感じるのが大事です。最初に作った姿勢をそれ以後ずっとかたくなに維持するというのではなく、坐禅の最初から最後まで自分と床のより良い関係をどこまでも好奇心をもって探求し続けているというのが坐禅の実践なのです。手や腕はリラックスして肩から鎖をたらずような感じで膝の上に置きます。どこにも無理に力

を入れず、力まないで、骨格の全体がバランスを取ってくれている状態です。過去や未来のあれやこれやを考えると坐禅には必要ないことなので極力やめて、今している坐禅の中で刻々に起きていることを深く味わえるように心を坐禅に寄り添わせます。ところが坐禅に寄り添っていると、今聴こえているもの、見ているものが何の努力もなく気づきの中に入ってきます。考えを追いかけている時との大きな違いを感じとることができます。はい、では静かに坐りましょう。

(しばらく続いた坐禅が終わり、講演が始まる)

● 命令&コントロール=「習禅」の特徴 強為(ごうい)

- 他律的 (外から内へ)
- 二元的 (主—客、手段—目的)
- 拘束や強制によって押し付けられた秩序
- 強制的
- 一方的
- <doing>モード
- テクネー(ギリシア語) テクノロジー、テクニクの語源
- 課題志向的
- まだ持っていないものを手に入れようとする
- 所有 Having
- からだ・息・ところを物扱いする

私たちがよく知っている習禅のパラダイムには、「命令&コントロール」という特徴があります。姿勢、息、ここはこういう風にならなければならないという、外部にあらかじめ存在する指図にしたがって、セルフ・コントロールによってそれを遂行するというやり方です。先生とか指導者・老師などから教わったり、あるいは本を読んだりして、マニュアルの形で私たちは何をすべきかを学びます。姿勢・呼吸・ここに関して、脚を結跏に組むとか、腹式呼吸であるとか丹田呼吸で息をすとか、呼吸に集中するとか、無念夢想の状態になるとか、とにかくこうしなさいというメソッドを素直に受け取り、忠実に実行しようと努力します。最初はうまくいかなくても、練習していくうちに次第にうまくなっていく。われわれが何かのスキルを身につけるときは、大体この形でやっていると思います。

この時には、なにをするべきかを命令する「私」という「主体」があります。この「私」が自分のからだをあたかも客体であるかのように指図に従って扱います。このような命令とコントロールによるパラダイムで行われている営みを、道元禅師は「習禅」と呼んでいます。その特徴は、私の意思によって強制的に命令しコントロールする「強為(ごうい)」にあります。それは外から内へという方向性を持った他律的な営みであり、そこには主体・客体、手段・目的という二元的分別があり、拘束や強制に

よって外側から押し付けられた秩序を作り上げようとし
ます。それは行うことによって今はない何かを実現し
ようとするdoingモードです。

ギリシャ語でテクネーというコンセプトがあります。
それは人間が狡知や挑発を駆使して自然が内側に隠し
持っているものを外に無理やり引き出して、それを自分
の都合のために利用するという営みを指しています。ま
だ自分が持っていないものを手に入れようとする努力
がテクネーです。テクネー的な習禅では、私たちはか
らだ・呼吸・こころを物のように扱って自分の思い通り
にしようとしています。からだ・呼吸・こころが今どう
なっているか、そしてどうしたいと思っているかという
先方の事情や言い分を全く無視し、権威的に頭ごなし
の一方的な指図を出して、俺の指示の通りにしろと、命
令・コントロールを押し付け拘束していくというのがこ
のパラダイムのあり方です。

こういうアプローチはある局面においては確かに必要
な時もあり、われわれの学校や社会ではこういうパラ
ダイムがうまく出来ることが成功者とされる場合がほと
んどだと思いますが、このパラダイムではどうにもなら
ないということが人生には起きてきます。これ一つしか知
らないというのはやはりまずいということです。仏教は
それとは違うパラダイムを坐禅という具体的な形で提供
しています。

● もう一つのパラダイムとは？

では、それとは別のパラダイムとはどのようなものか
ということになりますが、それは「感じて、許す」という
パラダイムです。ここでは何をどうしろという指図が外
から与えられるのではなく、自分が取り組むべき「ねら
い・方向性」を修行の課題として引き受けるのです。具
体的なねらいとしては姿勢に関しては「正身端坐」、呼吸
に関しては「鼻息微通」、こころに関しては「思量箇不思
量底（非思量）」ですが、これをテーマとして大事にして
実際の坐禅を通して身心を挙げて探求し、参究していく
のです。あらかじめ存在している解答を自分に当てはめ
るのではなく、正身端坐、鼻息微通、非思量とは何かを
坐禅に問いかけていくという学びの姿勢なのです。

例えば「正身端坐」というのは自分の体軸と重力の方
向との関係に関するテーマですが、実際に自分の姿勢
が正身端坐といえるような状態なのかどうかを感覚を通
して感じ探求していくのが坐禅です。何らかの指図を
受け入れ一方的に命令しているとき、私たちはからだ
とこころの状態が今どうなっているかを親密に感じたり
はしませんが、このパラダイムでは自分の身心がどうい
う風になっているかをまず深く細やかに感じる事が出発
点になります。今を味わい自分に親しみ、自分に何が起
きているかを感覚を通して素直にありのままに感じると

ということです。そうすると、身心の方から、そのフィ
ードバックを受けてなんらかの変化への促しがやってき
ます。こうしなさいという外側からの命令ではなく、重心
を左に少し移したくなったり、息をもう少し長く吐きた
くなったりといった、無意識からの自ずからなる変化が起
きてくるのです。私がこうしようと頭で考えるのではな
く、からだの中で自発的に起こってくる変化です。身心
を固めて緊張しているとそういうことにほとんど気づき
ませんが、リラックスして感覚を開放していると内側か
ら微妙に起こってくるものに気づくことができるのです。
坐禅をしている最中に姿勢も呼吸もこころの状態もどん
どん変わるし、この変化は絶え間のないプロセスとして
坐禅の間ずっと起こり続けています。心臓や呼吸の動き
が波のような形になって変化し続けているように、坐禅
も静かにしかし確かに脈動し息づいているのです。

● 感じて許す＝坐禅の特徴 云為(うんい)

- ・ 自律的
- ・ 非二元的（主客一如、修証一如）
- ・ 自由から自ずと生成してくる秩序
- ・ 自発的
- ・ プロセス志向的
- ・ <undoing>モード
- ・ ポイエーシス(ギリシア語) ポエムの語源
- ・ 既に持っているものをappreciate(理解し感謝)する
- ・ 存在 Being

さて、先ほどの「強為」に対する言葉は「云為」とい
います。私の自我意識が主人公になって強制的に何かを
やろうとするのが強為であり、云為は自発的に起きてく
る行為です。例えば、ため息やあくび、くしゃみや恥づ
かしい時に頭を掻いたりするというのはそういう云為の
例です。

云為の特徴は、他律的な強為に対して自律的である
ということ。姿勢に関していえば、最初に何らかの手ほ
きを誰かから受けるにしても、坐禅が始まれば頼れるの
は自分の感覚だけです。本には坐禅中の目線は45度下
に落とすとか1.5メートル先を見るなど書いてありますが、
これなどは典型的な強為のアプローチですね。それ
だと45度をはずれたら失敗になってしまいます。道元禅
師はそんな数値的なことなど一言も書いていません。そ
ういう外からの拘束的な指示に従うのではなく、坐禅中
の眼がどうあるべきなのかは自分で坐禅に問いかけて
探っていくしかないのです。

私も昔は典型的な強為的な坐禅指導を行ってしまし
た。アメリカの人たちは、ある意味非常に素直なので、
「先生、横からわたしの目線が45度の角度になっている
かどうか測ってみてください」と言ったりする人もいまし

た。マニュアルに従って自分に向かってあれこれと命令を出して、それがうまく出来ているかどうか自分の外側にいる先生に聞いて、先生からOKが出たら自分はちゃんとやっていると考え。どうして45度であるべきなのかは問わない。ここには、自分の感覚に問うて、自分で探っていくという自律的な参究がありません。言われたことをうまくやろうとする努力があるだけです。坐禅はそういうやり方でやってはいけないと私は思っています。それでは面白くないし、ワクワクしません。自分の創造性を発揮する余地がないからです。

云為は強為のように二元的でなく、坐禅の場合、「自己が自己を自己する」といわれるように主体と客体が二つに分かれません。そして曹洞宗の「修証一如」という教義にもありますが、修行と悟りがここでは一つになっています。私たちは普通、修行して長年の苦勞の挙句にいつか般若とか覺りとかが手に入るというふうに考えています。実は全然そうではなく、われわれはすでに与えられている般若に支えられて修行しているのです。

強為のアプローチでは、外側から鑄型をはめるように拘束によって秩序を作り出そうとしますが、云為ではこことからだに自由を与えるところから自ずからなる秩序が内側から生成してくるのです。

また、云為は常に現在進行形で成果よりもプロセス志向的ですので、どういう経路でそうなるのかのほうは、何が出来上がったかということよりも大事にされるのです。

強為のdoingモードに対しては、云為はundoingモードです。するのではなくやめる、ということです。余計なことをやめ、スイッチをオフにして、なるべくシンプルに坐ります。やる鍛錬からやらない鍛錬へとパラダイム・シフトを行わなくてはなりません。

テクネーに対してはポイエーシスというコンセプトがあります。これはギリシア語の言葉で、ポエム（詩）の語源になっています。自然が内に秘めている豊かなものを一方的に外に現してわれわれ人間に与えてくれる営みのことです。たとえば、植物の種が育ち実を結び食べ物としてわれわれに与えられるというようなことです。

云為は既にポイエーシスによって与えられているものを appreciate します。appreciate という言葉には意味が二つあって、一つは深く理解するということともう一つは深く感謝するということです。われわれは太陽の熱や光、空気などが自然から一方的に与えられて生かされて生きていることを深く理解したら、そこに自ずと感謝の気持ちが起こってくるものです。云為の場合は既に豊かに与えられているものへのしみじみとした appreciate がありますが、強為の場合はそういうことは起こりません。無理やりぎゅうぎゅう押してストレッチしてからだを柔らかくしようとしたりするの強為のアプローチです。

からだやこころの声を聴かずに自分に強制的に命令する。ブッダはこういうアプローチを最終的には放棄したのです。自分でさんざん強為の瞑想や苦行を試みて、これではだめだったと見極めたあとにやったのが云為の坐禅でした。ですからわれわれが強為の習禅をやったら、それは退行だと言わなければなりません。

● 大乘の坐禅

ただわが身をも心をもはなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもつひやさずして、生死をはなれ、仏となる 『正法眼蔵 生死』

云為について道元禅師がなんと言っていたかという、上記の通りです。これはさっき言ったundoingそのものです。「私が〇〇する」のではなく、「自分の身も心も仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき」というのが「許す」ということです。「仏（大自然）のかたよりおこなはれてくること」を感じるの粗雑な感受性では出来ません。それを感じて許すとき、初めて「生死をはなれ、仏となる」のですが、その条件が「ちからをもいれず、こころをもつひやさずして」なのです。こういうことを聞くと、ぐにゃっとだらけてしまっただけで横になってぐうたらしているのを「ちからをもいれず、こころをもつひやさずして」などと思ってしまうわけですが、このところは曹洞宗のお坊さんならそういうあり方を正しく理解する努力をしなければなりません。

大乘仏教の坐禅は、これから改めて仏に成るために坐るのではなく、坐って本来成仏であることを証しする、証明するのです。仏になること的手段として坐っては全然方向性が違ってしまいます。今まだない般若や菩提を得るために坐禅するのではなく、既にある般若や菩提をフルに活かして坐禅するのです。私たちには先人の遺産としてこういう教えが伝わってきており、もう始めからそこから出発できます。これがいかにありがたいことであるかを改めてかみしめなければなりません。それを端的にいうと、坐禅は習禅にはあらず、安楽の法門なり『正法眼蔵 坐禅儀』となります。自分の家を離れて外になにかを探しに行くのではなく、自分の家に帰り穏やかに坐ることです。帰家穩坐です。こういうことは、単なる観念ではなく、自分の身に照らしてからだで理解しなければなりません。

● 正身端坐の参究

「正身端坐すべし」というのが曹洞宗の坐禅の奥義です。それはひだりへそばだち、みぎへかたぶき、まへにくぐまり、うしろへあふのくことなかれ。必ず耳と肩と

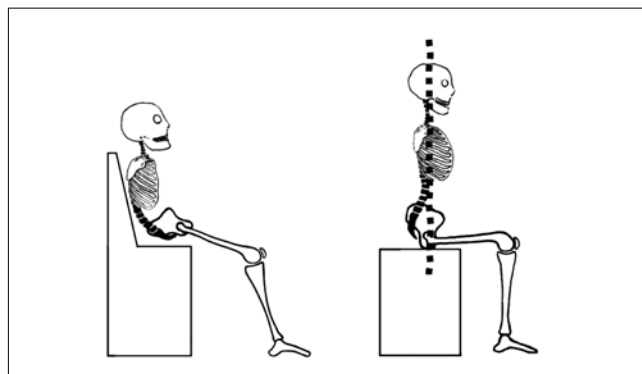
対し、鼻と臍と対すべしと『正法眼蔵 坐禅儀』にちゃんと書いてあります。あるいは「項(うなじ)を以って背に差(たが)うことなかれ『永平清規 弁道法』ということも書いてあります。

しかし鏡で自分の姿勢を見ながら胸を張ったり筋肉を緊張させて、一方的に正身端坐を見かけの上で作ろうとすると、それは強為のやり方になってしまいます。

次の赤ちゃんの写真を見てください。この赤ちゃんは楽に普通に坐っているだけです。良い姿勢で坐ってやるぞというような余計な力みや計らいがありません。道元禅師のいう正身端坐というのは、別の言い方をするとこの赤ちゃんのようにからだの軸と重力のバランスが自然に取れている状態です。



赤ちゃんのお坐り
(尚己くん 撮影時生後11ヶ月)



坐骨と体軸

こちらの図についていえば、同じ椅子に坐る場合でも、右の骸骨は骨で支えて筋肉は極力使っていない状態です。感覚を手掛かりにして軸を立てて坐っています。左の方は、軸のない坐り方で、骨格のバランスがとれておらず筋肉の緊張で姿勢を維持していかないといけないので、背もたれがなければ倒れてしまいます。このように骨盤が倒れ、軸が生まれないような状態で坐っていたら、どうしてもゴソゴソ動いてしまったり、眠くなってしまう。落ち着けないし、ここも鎮まりません。

坐骨のどのポイントで自分の体重を受けとめるかが大事だということを自覚しないと、無理矢理の坐禅になってしまいます。

次の写真は、バランスで立つ卵です。指先で卵と対話しながら繊細に感覚を研ぎ澄まして、どういう置き方なら立てるかを「感じて、許す」とそのうちフツと立ちます。



ぜひ皆さんもやってみてください。これと同じような感じで、私たちも正身端坐にアプローチできるのではないかということです。

雲水さんが指導するのを見ていると、背中が丸くなっている人の腰を後ろからぐっと押しているのをよく目にします。どうも、ぐっと腰の入っている姿勢でいることを坐禅を頑張っていると評価しているようです。しかし、外から強制的に手で押して姿勢を直してもそれは直された側の学びにはほとんどなりません。

正しい姿勢は最初から出来合いの形で決まっているのではなく、そのつどからだに聴きながら、丁寧に正しい坐相を探して行くのです。

上の右の写真は、私が綱渡りをしている写真です。平衡感覚を研ぎ澄まし、手や脚や首やからだのあらゆることを自由に柔らかに動かして、一瞬一瞬バランスを取って歩いて行きます。頭で決め付けしないで、からだに聴きながら、感じて許し続けるのです。

だから正身端坐の坐禅では、あんまり動くなとか動いたら叩くといったことではいけないなとは私は思っているのです。居心地が悪いのを我慢してじっとしていなければいけないと思い、それに慣れてしまうと、我流の「癖のついた坐禅」になってしまいます。

● まとめ

「只管打坐」の坐禅の特徴として、息を調えるのも坐相の工夫でそれをやるのだし、ここを調えるのも坐相でやるという、「正身端坐を先とする」ということがあります。

自然なバランスがとれた、深いリラックスした坐相でいると、息も自然と調ってきます。自分自身に楽に呼吸をさせてあげられるような姿勢を探し、空気を人為的に無理に押し出したりせずに、息が自然に肺に入り肺から出て行くようにします。自分で命令してコントロールするのではなく、なるべく余計なことをしないで (doing less) ただ息に親しんで息と遊ぶという感覚で、息のことは自分より息の方がよく知っているのですから、息に学びながら「鼻息微通」の実際に近づいていくのです。

調心についても、正身端坐が出来れば自然に調ってく
るようになっていきます。

坐禅は、「感じて許す」というあり方を参究していくこ
とです。姿勢・呼吸・心理状態を深く「感じ」、それを自
分の好きなように変えようとしなくて、頭の中からでな
く「感じたこと」から出て来る自然の動きにまかせます。
仏のかたよりもようされてくることに任せるということ

す。自調、つまりセルフコントロールではなく、自分が
生まれたときから持っている身心の自己調整の智慧にま
かせて坐っている、それが坐禅であるといき言いが
無いのです。

今日言いたかったことは、私の書いた本にも書いてあ
りますので、興味のある方はご一読ください（裏表紙に
案内があります）。

修行僧の感想（抜粋）

- ◇坐禅は、大地・重力・空気などに助けられてやっている生
命躍動の姿とおっしゃっていたのが印象に残っています。
- ◇今日のように坐禅について深く学ぶと、気軽に取り組ん
でいた坐禅に、より興味が湧きました。自分なりの「坐禅は
〇〇なり」というのを見つけたいと思います。
- ◇坐禅には人それぞれの形があるということを知りました。
- ◇坐禅に対する固定観念（一般的）を取り除くことが必要と
いうお話に大いに納得しました。
- ◇自分の中にあったそれまでの坐禅のイメージが変わりまし
た。坐禅といえば姿勢を正しく、息を整え目を開けて動か
ないでと思っていましたが、それは自分から整えるのでは
なく自然に整う、ということになるほどなと感じました。
今日の講義のような坐禅に対する考え方というのは、国際
布教を行っている人ならではの考え方だと思います。国際
布教に関わることで、新しい視点から仏教・坐禅に組み
込むことが出来るのかもしれない。
- ◇坐禅の講義としてとても勉強になりました。ですがSOTO
禅インターナショナルの方々はどういった布教活動をして
いるのか、国際布教とはどういうものなのかが伝わって来
なかったのが残念でした。
- ◇坐禅に対する意識が変わりました。「坐禅は我慢大会では
ない」という言葉がとても印象的でした。
- ◇国際布教には以前から興味があつた。というのも海外で仏
教への関心が高まっていると聞いたとき、やはり必要とさ
れるところで僧侶としての働きをしたいと思い、現代の日
本における宗教離れも併せて考えたとき、海外での活動も
視野に入れるようになった。今回の講演で、坐禅に対する
考え方・捉え方の違いがあるため実際の坐禅が間違っ
て行われていることを知り、国際布教に限らず、送行後檀家
さんと接する際にも、坐禅の本質をきちんと教えることが
重要だと感じた。そのためにも、もっと意識を持って毎日
の修行を続けていくよう努めたいと思った。
- ◇骨格から見た坐り方の話が非常に興味深く、またため
になった。私自身も猫背なので、これからの安居で身体に負
荷のかからないきれいな形で坐れる位置を探していこうと
思った。
- ◇坐禅は型も大切だが、坐禅をすることに集中するマインド
面がより重要だとおっしゃっていました。海外の禅堂では
型にそこまでこだわらずにやるところもあって、その方が
禅自体を布教しやすいとは思いました。ただ永平寺では、
『普勧坐禅儀』にあるように坐り方が細かく決まってお
り、それを継続すること、正しく行うことも大切であると思
いました。
- ◇海外では禅が受け入れられる過程で、気風や文化に合っ

たスタイルに変化した。形はどうあれ、禅という文化が彼
らの日常に受け入れられたのは、海外布教に努められた
人々の功績だと思う。今海外から逆輸入された新しいスタ
イルの禅は、私たち特に形を重視する曹洞宗の禅とは別物
だと感じていたが、講演を通して、そのスタイルが日本で
また創意工夫を経て受け入れられる中で、曹洞宗の教えを
上手に活かすことが出来ればよいと思う。

- ◇本日の講義を受けて、坐禅に対する考え方や意識が変わり
ました。私は坐禅に対して難しいという意識しか持って
いませんでした。しかし、話を聞いて坐り方一つに多くの工
夫があり、ある意味どこまでも追求が出来るものなのでは
ないかと思いました。
- ◇永平寺では聞くことが出来ない坐禅のメカニズムを、最近
の研究や『正法眼蔵』の言葉を用いて話していただき、大
変分かりやすかったです。
- ◇坐禅は強為として行う物ではないということが理解出来
た。自意識が「坐る」ということをコントロールしていると、
自分自身考察することが出来た。理想に近づこうとして坐
るのではなく、自然のまま、あるがままにこれから坐っ
ていきたい。それから曹洞宗の海外布教の体制は、他の宗派
に比べてバックアップが足りないと思うし、布教師個人に
任せきりになっているのではないかと懸念する。
- ◇脳や骨髄、眼球など、人間の構造から坐禅を分析したのは
とても新鮮でした。
- ◇「外で教えを広めることはしない。自国を整えろ」これが私
が思うことなので、仏教を国際的に布教する必要性をまだ
肌で感じておらず、布教師を応援はしません。乙川弘文師
のような人がまた現れてほしいと思いますが、日本の荒れ
た畑を耕せることが出来る僧侶。私たちが目指す姿はそれ
が最優先だと信じている。
- ◇今回の講義のように、一度は心得や方法論を噛み砕いて学
ぶ機会は必ず必要です。藤田老師がいかにかに人々に真剣に
向き合って来られたか、坐禅を知らない人々に根気強く伝
える努力をされて来たかがうかがい知れる非常に有意義な
講義でした。
- ◇現在の（国内の）衰退は、伝える努力の怠慢とスキルの低
下によるところは大きいと思います。国際布教に携わる意
義は、「顧客」のいない環境に身を置くことで問答無用に
「伝える努力」が必要となり、「伝わらなければ生きていけ
ない」状況を作ること、話のできる僧侶を増やすことに
もつながると思います。やはり自分はもちろんのこと、全
員が国際布教に多かれ少なかれ関わるべきであると再認識
しました。

… 海外レポート① …

コナ大福寺開創100周年慶讃法要に参加して

新潟県興源寺住職 田宮隆児 (SZI 副会長、コナ大福寺第11世)



台風アナの接近にともないハワイ島内の全てのビーチが閉鎖された10月18日に、コナ大福寺開創100周年記念慶讃法要初日の行事が行われました。予想される悪天候のため、急遽会場をお寺からホテルへ移し“Okagesama de, we are here today”のテーマのもと式典は開会しました。

大福寺開創100周年を祝うため、地元コナはもとよりハワイの各島、アメリカ本土、日本より350名を超える方々が集まるなか、式典は佐藤博道師(大福寺第7世)導師のもと布教師物故者法要の厳修で始まりました。引き続き現在大福寺の法務を勤める中出慈光師導師のもと大福寺メンバー物故者法要が行われました。さらにハワイでは3人目となる僧侶を補佐する役のDeaconとなった中出Amy慈海師のDeacon修了式が行われました。(Deaconとはキリスト教において神父や牧師を正式な場で補佐をする役職)初日の行事は写真撮影、餅まき、昼食へと続きましたが、少し移動するたびに懐かしい方々に出会うため私と妻と息子は終日kissとhugと握手、それに涙と笑顔で顔はくしゃくしゃになりました。

台風が進路をそれた2日目(10月19日)は天候が荒れることもなく予定通りハワイ国際布教総監駒形宗彦師(大福寺第8世)導師のもと大福寺開創100周年慶讃法要が

厳かに行われました。先日からの熱気に包まれた会場では昼食後、実行委員会によって念入りに用意されたプログラムが行われました。プログラムは開創当初の貴重な写真を含むスライドショーの投影、長い間お寺を支えてこられた敬老者の表彰、そして元開教師やそのご家族が思い出等を語られました。中でも日本から参加され、大福寺ご開山児玉介石師のご子息にあたる児玉氏は年齢80歳半ばながらとてもお元気で、流暢な英語で祝典に参加できる喜びを噛みしめておられました。和太鼓グループ「コナ大福寺太鼓」の演奏では、今では島を離れている元メンバーの参加演奏もあり多いに盛り上がりました。グループを創設した私と妻の敬子も檀上に上がり数年ぶりにバチを持ち、汗と冷や汗の両方をかきました。また最後に檀上に上がったウクレレグループによる演奏曲の中には中出慈光師作詞作曲の100周年記念ソング「Okagesama de」が演奏され3年間の準備期間を要した記念式典は幕を閉じました。

今回の法要に参加し、あらためて海外のお寺はメンバーの皆さんが「私達のお寺」という誇りと自信を持ち、そのヘリテージをさらに後世にも伝えたいという意志の強さを感じました。海外では多くの日系寺院活動が停滞するなか、大福寺では旧来のメンバーと新しく迎えられた方々の和を尊びながら様々なプロジェクトが取り入れられ、丁寧に、大胆に、積極的に行事が行われているように思いました。またこの取り組みはこれから益々多様化する日本における布教活動や寺院のあり方への参考となり問いかけにもなるものと思います。日本を発ってあつという間の4日間でしたが、心はアロハスピリットで満たされ仏縁の尊さに心動かされた旅でした。



法要を終えて記念撮影



とてもお世話になったミエちゃんと「はい、チーズ」

… 海外レポート② …

「ヨーロッパに根付く曹洞禅」

—大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌ヨーロッパ予修法要に参加して

神奈川県成願寺住職 廣澤道秀^{ひろさわ どうしゅう}

大本山總持寺大遠忌局の勧募課長を現在勤めさせていただいている私は、岡本俊一副寺、前田道孝勧募副総務の随員として、5月17、18日に厳修された大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌ヨーロッパ予修法要に参加いたしました。堂宇も然ることながらヨーロッパの文化に適応し、発展を遂げた禅道尼苑へ2日間の短い期間でありましたが伺わせていただいたことは貴重な体験となりました。

予修法要には、宗務庁からは、出版部長砂越隆侃老師（当時）と国際課嘱託員松田英寿師（当時）が参加されました。

フランス・ブワ市の禅道尼苑が会場となり、17日にヨーロッパ国際布教総監フォルザーニ慈相老師ご導師により、逮夜特為献湯諷経が執り行われ、続いて前田勧募副総務による峨山禪師についての講演がなされました。レンガ造りの接賓を始め、広大な敷地に事務所や食堂、菜園、パン焼き小屋や工作棟を備えた苑内には、禅道尼苑を開いた弟子丸泰仙老師が祀られており、法要前にお参りをさせていただきました。

講演は、日本語で峨山禪師の生涯・功績や大遠忌事業について話している箇所に応じてフランス語・英語訳文をスクリーンに投影する形式で進められ、約50人の参加者にご清聴いただきました。その後、夕食歓迎会まではホールに併設されたバーカウンターに於いて懇談が行われました。歓迎会では、典座寮で調理された欧風のサラダの他、酢飯を使用した料理などが振る舞われ、歓待を受けました。

18日には、特為献供出班諷経が砂越隆侃老師ご導師により厳修され、曹洞宗国際センターの主事南原一貴師、書記伊藤祐司師指導の下、入念に馴らしを行った甲斐もあり無事に法要を執り行うことが出来ました。本堂は絨毯張りのコテージの様な造りで、中央に手作りの須弥壇を備えており、日本とは違う様式での法要は新鮮に



無事に法要を終えて



フォルザーニ布教総監の挨拶

映りました。

翌日はパリ市内の仏国寺を訪問したのち、ヨーロッパ国際布教総監部に立ち寄らせていただき、到着から出発まで総監部の皆様方には大変お世話になりました。

ヨーロッパ開教の先駆者である弟子丸泰仙老師について、私は不勉強で詳しく存じ上げていなかったのですが、禅道尼苑や仏国寺には、そこかしこに老師の写真や書が見受けられ、どれも力強さを帯びたものでした。開教当時にヨーロッパの人々を曹洞禅へと傾倒させたそのエネルギーを遷化されてから30年以上を経た現在でも色濃く感じさせておりました。

また、出発するにあたり、大本山總持寺独住第18世孤峰智璨禪師著の「歐山米水記」を拝読いたしました。この本は、禪師さまがハワイ・ホノルル曹洞宗別院創立50周年法要参加の為、昭和35年9月に出発し、アイゼンハワー大統領と対面するなど3ヵ月間アメリカ、ヨーロッパを歴訪した際の道中を認めたもので、当時80歳を超えた禪師さまの矍鑠たるご様子を窺うことができます。この頃ヨーロッパには曹洞宗の宗教施設が無く、日本の商社の現地駐在員の方がお出迎えやお世話をなさっていた件があり、約50年を経て曹洞宗が4ヵ所の国際布教総監部を設立して布教活動を行って大いなる発展を遂げていることは、隔世の感があります。

今回初めて海外布教に関わらせていただいて、ヨーロッパに留まらず、世界各地の社会・文化に適応して根付いている曹洞禅の一端を垣間見ることが出来た事を感謝いたし、更に発展をすることを祈念しご報告とさせていただきます。



メンバー調理による歓迎会の食卓

… 国内レポート …

役員近況報告

宮城県城国寺副住職 ^{すが} ^{わら} ^{けん} ^{しゅう} 菅 原 研 州 (愛知学院大学教養部講師)

この場をお借りして恐縮ですが、2014年3月末で曹洞宗総合研究センターを退職し、4月より愛知学院大学教養部の教員に就きました。会員の皆様におかれましては、ますますのご指導・ご鞭撻のほど、心よりお願い申し上げます。

つきましては、愛知学院大学の現状について記事にしたいと思います。

本学は、本年4月から、名古屋市北区の名城公園に新設されました名城公園キャンパスを始動させました。首都圏の状況と同じく、名古屋市周辺でも大学キャンパスの都心回帰が顕著であり、その流れにしたがったものといえます。特に、同キャンパスではビジネス系3学部(経済・経営・商)の学生が学ぶこととなりますが、日本社会・日本経済が未曾有の少子高齢化、人口減社会に突入している昨今、新しい学舎で学ぶ学生が、良い未来を切り開いてくれるよう願ってやみません。

名古屋に来てみて感じたことですが、横浜市・大阪市に次ぐ226万人以上の人口を要する名古屋市、及びその周辺の若者は、地元志向が強く、就学から就職までを名古屋近辺に定める場合が多いようです。全世界的な視点からすれば、名古屋市周辺の経済規模は限られていますけれども、その中で充実した人生を歩む努力を行ってくれるよう学生には期待しています。グローバルな視点を忘れず、しかし地元を志向し、その関係の中で生きるということです。まさしくグローバルということでしょうか。

また、小生は、教養部を本属としながら同時に、学内にある禅研究所の兼任研究員も拝命しました。同研究所は、1965年に創立され、1980年には日進キャンパス

に専用の研究棟と正規の坐禅堂が建立されました。つまり、来年は開所50年、坐禅堂開堂35年を迎えることになります。

研究所の設立目的は、本学の建学の精神である「行学一体・報恩感謝」を、大学の内外に知らしめることにあります。通常の業務としては、毎月1回の火曜参禅会(基本は第2火曜日17時から)を行い、研修旅行と禅籍調査をそれぞれ年1回ずつ実施しています。月例坐禅会には、毎回多くの方にご参加いただき、その参加者などで組織する参禅会の会員に、研修旅行へ参加いただいています。2014年度は出雲大社を始め、鳥取・島根両県にある宗門御寺院を拝登いたしました。また、本学の学生は全員、必修科目を通して必ず坐禅を体験します。

現在、研究所に所属しながら、改めて「禅」の位置付けや性格について考えています。それは、2013年に中国河南省・崇山少林寺を拝登し、お目にかかった監院老師から「禅」への思いを伺って以来、私自身の問題としています。かつての「禅」の性格付けは、シンプルなことばかりが強調されましたが、実際にはシンプルさはシンプルさとして、複雑さは複雑さとして、ともに尊重する精神的営為です。教義や修行体系は、まさしく変幻自在であります。しかし、その自在さは最も優れた特性であり、我々にしなやかさをもたらします。しなやかさの中で普遍性と特殊性とがほどよくかみ合い、何度見ても新しいのが「禅」であり、だからこそ、世代や地域を越えて様々な人を惹き付けるのです。

来年は周年事業を通して、しなやかに禅研究所の存在を際立たせていきたいと思っております。現段階としては、記念法要・記念講演・記念出版事業などを計画していますが、皆様におかれましても、ご支援をよろしくお願い申し上げます。



名城公園キャンパス



禅研究所坐禅堂内

SZ/express

会費納入者・賛助金納入者名簿

2013年12月1日～2014年10月31日まで

ありがとうございます。
大切に使用させていただきます。

■ 会費納入者ご芳名

(順不同・敬称略)

静岡県 萬松院 吉田宏得
愛知県 神蔵寺
秋田県 補陀寺 大山陽堂
宮城県 松源寺 東海泰典
愛知県 春江院 宮田春光
愛知県 永澤寺 岡島博司
福島県 長泉寺 石月聰明
静岡県 栄林寺
北海道 中央寺
愛知県 慈光院内 戸田規子
茨城県 龍泉院 北條正興
埼玉県 東榮寺
広島県 聖光寺 田中哲彦
愛知県 霊岩寺 川橋範子
秋田県 松庵寺 渡邊紫山
埼玉県 興禅寺 武田秀嗣
埼玉県 建福寺 安野正樹
静岡県 元長寺
群馬県 仁愛寺
東京都 清巖寺 来馬宗憲
東京都 玉宗寺
新潟県 大榮寺
新潟県 植野 晃
山形県 宝泉寺 采川道昭
北海道 長福寺 長尾龍心
静岡県 宗徳院 松永寛道
東京都 福壽院
東京都 田中良昭
宮城県 海蔵寺 木村定信
東京都 喜運寺 磯貝昌隆
鳥根県 松源寺 佐瀬道淳
長野県 正麟寺
千葉県 観音寺 安本正道
秋田県 中泉俊堯
千葉県 宗胤寺 児玉重夫
群馬県 (南)オモロ
東京都 秋葉玄吾
東京都 建明寺 堪山泰学
静岡県 随縁寺 内山秀三
埼玉県 廣田俊和
千葉県 関 光輝
東京都 奈良康明
静岡県 糸柳格順
愛知県 天徳寺
愛知県 神野哲州
宮城県 秀林寺 計良弘信
栃木県 黒田泰弘
京都府 祥雲寺
東京都 宗清寺
静岡県 信香寺 高田路久
福島県 昌建寺 秋 央文
長野県 桃源院 山本健善
神奈川県 大蔵寺 佐藤直道
福井県 洞雲寺
東京都 龍澤寺 関岡俊二
埼玉県 城國寺 佐藤亮子
宮城県 一乗寺 菅原英州
神奈川県 興禅寺 市川智彬
宮城県 洞安寺 大山浄心
愛知県 永井成典
福島県 石雲寺 葉貫成悟
青森県 大乘寺
東京都 静勝寺 高崎忠道
秋田県 龍寺 八島国雄
茨城県 鏡徳寺
埼玉県 廣徳院

埼玉県 圓通庵 宝泉寺
愛知県 永明寺
福島県 雲門寺
神奈川県 華嚴寺
群馬県 保善寺
山口県 西有寺
東京都 興龍寺
神奈川県 冷泉寺
長野県 大泉寺
静岡県 善栖寺
宮崎県 大興寺
静岡県 龍寶寺
神奈川県 耕龍寺
宮城県 東正寺
秋田県 大船観音寺
三重県 蔵円寺
神奈川県 龍潭寺
福島県 龍昌寺
愛知県 傳心寺
埼玉県 真光寺
千葉県 興徳寺
埼玉県 東泉寺
神奈川県 倫勝寺
静岡県 海蔵寺
群馬県 祥雲寺
静岡県 法幢寺
愛知県 (学)愛知学院
秋田県 自性院
神奈川県 最乗寺
福島県 天徳寺
埼玉県 宝持寺
埼玉県 宝積寺内
愛知県 長松院
東京都 佐藤昭次郎
茨城県 曹洞宗茨城県宗務所
(株)安江
神奈川県 吉祥院 尖 廣仲
山形県 宗傳寺 蓮池泰乘
新潟県 興源寺 田宮隆児
神奈川県 黙仙寺
神奈川県 天徳院
神奈川県 浄心寺
神奈川県 善光寺
千葉県 正翁寺
神奈川県 興国寺
福島県 満友寺
秋田県 相馬正之
東京都 宮下陽祐
千葉県 長興院 山田宗雄
宮城県 寿昌院 横山泰賢
広島県 大光院 田中俊光
山形県 見龍寺
千葉県 永興寺
北海道 定光寺 大道光肇
静岡県 先照寺
福島県 安穩寺 黒金義範
東京都 善徳寺 西山道樹
神奈川県 梅宗寺 加藤孝正
静岡県 永明寺 加藤孝正
神奈川県 德善寺 尾崎正善
静岡県 大昌寺
静岡県 可睡斎
北海道 明光寺
福島県 佛母寺 小野俊憲
福島県 (株)福島ビーエス観光
長野県 廣澤寺 小笠原隆元
新潟県 佐藤慧真
埼玉県 龍泉寺

東京都 観音院 岸 世一
埼玉県 岸 世一
東京都 (南)石夢工房
神奈川県 東泉寺
静岡県 林叟院 鈴木包一
東京都 全昌院 安達良元

■ 賛助金納入者ご芳名

(順不同・敬称略)

秋田県 補陀寺 大山陽堂
愛知県 春江院 宮田春光
愛知県 永澤寺 岡島博司
福島県 栄林寺 石月聰明
静岡県 慈光院内 戸田規子
茨城県 龍泉院 北條正興
埼玉県 東榮寺
埼玉県 大龍寺 伊藤智子
広島県 聖光寺 田中哲彦
埼玉県 興禅寺 武田秀嗣
群馬県 仁愛寺
東京都 清巖寺 来馬宗憲
東京都 玉宗寺
新潟県 大榮寺 五十嵐紀典
新潟県 植野 晃
山形県 采川道昭
北海道 長尾龍心
静岡県 宗徳院 松永寛道
東京都 福壽院
鳥根県 松源寺 佐瀬道淳
千葉県 観音寺 安本正道
千葉県 宗胤寺 児玉重夫
東京都 秋葉玄吾
静岡県 随縁寺 内山秀三
静岡県 洞雲寺 糸柳格順
宮城県 秀林寺 計良弘信
宮城県 祥雲寺
東京都 宗清寺
福井県 洞雲寺
城國寺 菅原英州
静岡県 一乗寺
神奈川県 興禅寺 市川智彬
愛知県 永井成典
愛知県 葉貫成悟
福島県 石雲寺
青森県 大乘寺
東京都 静勝寺 高崎忠道
茨城県 鏡徳寺
埼玉県 鏡徳寺 大場満洋
神奈川県 西有寺 横山敏明
宮崎県 善栖寺 野田素裕
神奈川県 龍寶寺 梅田良光
神奈川県 蔵円寺
静岡県 海蔵寺 富永博道
愛知県 (株)安江
埼玉県 圓福寺 池田常臣
神奈川県 正翁寺 篁 素明
東京都 源照寺 坂下康之
千葉県 長興院 宮下陽祐
宮城県 寿昌院 山田宗雄
千葉県 永興寺
北海道 定光寺 大道光肇
神奈川県 全龍寺
福島県 佛母寺 小野俊憲
静岡県 林叟院 鈴木包一
神奈川県 龍寶寺 梅田良光

神奈川県 浄心寺 栃堀眞英
神奈川県 善光寺 黒田博志
神奈川県 正翁寺 篁 素明
東京都 源照寺 坂下康之
山形県 見龍寺 大道光肇
北海道 定光寺 西山道樹
東京都 善徳寺 加藤孝正
静岡県 永明寺 (株)福島ビーエス観光
福島県 廣澤寺 小笠原隆元
静岡県 延命寺
東京都 観音院
東京都 (南)石夢工房
神奈川県 東泉寺
静岡県 林叟院 鈴木包一
長崎県 幹 明道

■ 塔婆供養で植林支援協賛者ご芳名

(順不同・敬称略)

神奈川県 大蔵寺 佐藤直道
愛知県 神蔵寺
秋田県 補陀寺 大山陽堂
愛知県 永澤寺 岡島博司
福島県 長泉寺 石月聰明
愛知県 慈光院内 戸田規子
茨城県 龍泉院 北條正興
静岡県 元長寺
群馬県 仁愛寺
東京都 清巖寺 来馬宗憲
新潟県 大榮寺 五十嵐紀典
静岡県 宗徳院 植野 晃
静岡県 随縁寺 松永寛道
静岡県 洞雲寺 内山秀三
愛知県 天徳寺 糸柳格順
宮城県 秀林寺 計良弘信
福島県 昌建寺 秋 央文
神奈川県 大蔵寺 佐藤直道
福井県 洞雲寺
城國寺 菅原英州
神奈川県 興禅寺 市川智彬
宮城県 洞安寺 大山浄心
宮城県 石雲寺 葉貫成悟
青森県 大乘寺
東京都 静勝寺 高崎忠道
茨城県 鏡徳寺 大場満洋
埼玉県 鏡徳寺 横山敏明
神奈川県 西有寺 野田素裕
宮崎県 善栖寺 梅田良光
神奈川県 龍寶寺
神奈川県 蔵円寺
静岡県 海蔵寺 富永博道
愛知県 (株)安江
埼玉県 圓福寺 池田常臣
神奈川県 正翁寺 篁 素明
東京都 源照寺 坂下康之
千葉県 長興院 宮下陽祐
宮城県 寿昌院 山田宗雄
千葉県 永興寺
北海道 定光寺 大道光肇
神奈川県 全龍寺
福島県 佛母寺 小野俊憲
静岡県 林叟院 鈴木包一
神奈川県 龍寶寺 梅田良光

植林累計 45件 苗木 14,956本分

■ 助成金

大本山永平寺
大本山總持寺
曹洞宗宗務庁

2015年 SOTO禅インターナショナル 総会のお知らせ

日程／2015年2月9日(月)

15時より 定例総会

会場／檀信徒会館 菊の間

なお、懇親会を17時より
檀信徒会館6階「レストランパンセ」にて
開催いたします。

※同封のハガキにて、
出欠の連絡をお願いいたします。

動 静 報 告

2013年12月～2014年11月

2013年

12月18日 海外日系寺院史校正作業 (行田市興徳寺)

2014年

1月22日 総会準備委員会 (檀信徒会館)

2月13日 総会・懇親会
(檀信徒会館菊の間・レストランパンセ)

5月28日 海外日系寺院史出版慰労会
(東京プリンスホテル満楼日園)

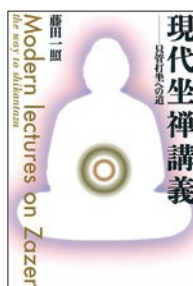
6月13日 役員会議 (日本橋第2長岡ビル)

9月5日 大本山永平寺WS (大本山永平寺)

9月17日 大本山總持寺WS (大本山總持寺)

なお、随時インターネットで役員会を開催いたしております。

藤田一照師著書紹介



『現代坐禅講義 —只管打坐への道—』

藤田一照
佼成出版社 定価(本体 2,500円+税)



『アップデートする仏教』

藤田一照、山下良道 共著
幻冬舎新書 定価(本体 880円+税)

両大本山ワークショップより

(右上は大本山總持寺、右下は大本山永平寺)



CONTENTS

- ▶ 巻 頭 真徳を慕う.....大本山永平寺監院 佐藤 好春 1
- ▶ 特 集 両大本山ワークショップ抄録
坐禅のパラダイム・シフト 「命令&コントロール」から「感じて許す」へ.....曹洞宗国際センター所長 藤田 一照 2
- ▶ 海外レポート
①コナ大福寺開創100周年慶讃法要に参加して.....新潟県興源寺住職 田宮 隆児 8
②「ヨーロッパに根付く曹洞禅」 一大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌ヨーロッパ予修法要に参加して.....神奈川県成願寺住職 廣澤 道秀 9
- ▶ 国内レポート
役員近況報告.....宮城県城国寺副住職 菅原 研州 10
- ▶ SZI express 会費納入者・賛助金納入者・塔婆供養で植林支援協賛者名簿..... 11
- ▶ SOTO禅インターナショナル総会のご案内／動静報告／藤田一照師著書紹介／両大本山ワークショップより..... 12